

麻生と麻布と浅茅生と（前篇）

高田友

近來、「羽生」なる名の著名の人二三出現す。漢字は違はねど、「はにふ（はにゆう）」と讀むあり、また「はぶ」と讀むあり。

「埴生の宿」なる歌、如今は忘却せられたれど、英蘭土民謠にて、往時は小學校にて教へられし文部省唱歌なり。

「羽生」は「埴生」より轉じたり。

そもそも、「柿生（かきふ）」とは柿のさには生ふるの地を言ふ。「生（ふ）」は草木の生ひ茂れるを言ひ、「桃生」は桃、「竹生」は竹、「芝生」は芝の、各垣生ふる地もしくは其の密集する様を言ふなり。越前國府なりし「武生」も始めは「竹生」なりしが、好字を選び、武を尊びて文字を改めたりけん。

「浅茅生（あさぢふ）」は「浅茅」の生ふる地なり。而して、浅茅とは「茅（ちがや）」なる草の丈低きもの。もしくはまばらに生えたる茅を稱し、かかる茅の生ひたるを浅茅生と稱す。

桐壺に「いとどしく蟲の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人」とあり。桐壺更衣亡き後、帝の御使なる女房の、桐壺母を見舞ひたるに、母北の方歎きて詠みたるなり。「浅茅の生ふる卑しき住み家に大宮人の訪れ給うて涙を誘はるるばかりなり」との意。

「埴」は赤土・粘土の類なり。而して、草木にはあらねど、その生ふるの地を「埴生」と言ふ。上古には「埴」なる赤土を「埴生」と呼びたるもあり、萬葉集には遊行女婦なる

清江娘子の長皇子に奉れる歌を載す。

草枕旅行く君と知らませば岸の埴生に匂はさましを

「太上天皇の難波宮に幸せる時の歌」と詞書にあり。皇子の持統上皇に供奉して難波に至り、藤原宮に還らんとしたまひし時に娘子の捧げたるなり。

「君の出で立たんとしたまふを知りてありせば、埴生を取りて君が衣に塗り、以て先途せんどを壽ことほがむに」との謂ひなり。旅立つ人の衣を赤土にて染め、旅路の安かれと祈る習はしありき。

「埴生の小屋せや」「埴生の宿」とは、「赤土を壁に塗りたる」もしくは「赤土の地に建てたる」卑しき家を言ふ。「埴生の宿も我が宿」は、「いかにみすぼらしき家なりといへども、我が家にまさるものなし」と故郷を偲べるなり。原曲のタイトルはHome, sweethomeなれば、宜うべなるかな、我が家を讃へたる。

もと「土」を「に」と言ひ、接頭辭を附して「さに」「はに」と呼びけり。時とともに、接頭辭なき「に」は「赤色・赤色顔料」の意に轉じ、「丹塗りの鳥居」なる言ひやうの生じたるなり。

「埴生」は卑しき地を指すにより、好字を以て置き換へ、「羽生」と表記す。「羽」は「はね」なれば、「はねふ」。訛れば「ハニユウ」ならで「ハニヨウ」となるべけれど、牽強附會してあながちに「ハニユウ」とは讀みたるなり。

一方、轉じて、「はぶ」と讀むは、「羽」を「はね」ならで「は」の一音に留め、「生ふ」を濁りて、「ぶ」としたるなり。伊豆大島なる「波は（浮ぶ）港」の「波は浮ぶ」も「埴生」の轉じたる「羽生」の文字をさらに好字に變へたりけん。

「奈良」の枕詞は「青丹よし」なり。「に」は本来「土」なれば、青土の義。青土は赤土と對比せられて、肥沃なる眞穂まほの地を言ふ。「よし」は「良し」にはあらで、間投助詞「よ」と「し」にて、「青丹よし」は「青土よ美しきかな」といへるなり。

なほ、古代の「青」は瑞垣みづかしく艶ある「黒」を指すの段多し。「白馬の節會」を「あをうまのせちゑ」と讀む。宮中にて正月七日の儀式に二十一頭の黒き馬を帝の御前に並ぶるの儀を言ふ。これが黒き馬を「あをうま」とは呼びたり。醍醐天皇の御代より黒き馬を白き馬に變へて、漢字は改めたれど、讀みは舊に仍りて「あをうま」を變ふるなし。

然則、（しからばすなはち）「青丹」は「青土」ならで、「黒土」の義。

「麻生」は「あさふ」の音便して、「アソウ」と發音せらるるに至る。

麻なる植物は、中央アジア原産なれど、本朝にても上古より廣く栽培せらる。「麻生」とは麻を栽培するの地を言ふ。

一方、東京には「麻布」なる地名あり。「羽生」の「はぶ」になりたると同斷にして、「麻生」の「生」を「ぶ」と讀みたるにより「あびぶ」。後來、「ぶ」の音に引かれて、「生」を「布」に變へたりけん。

國內(くぬち)には「麻生」と書きて「あびぶ」「あさぶ」と讀むの地名もあり。

(令和二年十月十五日受附)